

幼稚園教育要領の領域「表現」についての考察 — リトミックを中心に —

森 千恵子

(2017年9月25日受理)

要 旨

本研究は、幼稚園でとりいれられているリトミックが幼稚園教育要領領域「表現」において、どのように取り扱われているかを、幼児と共に参加している教諭の意識や、幼児の姿にみえてくる効果という観点から調査したものである。

調査からは、幼児が音楽に親しみ、感じたことや考えたことを自分なりに表現することを楽しむことや、多様な表現方法を経験することが、自然に行われている様子がうかがえた。教諭が幼児と一緒にリトミックに参加することによって、リトミックが良さそうと言う漠然とした情報や、本で読んだ知識ではなく、リトミックの基本理念を理解し、幼稚園教育要領領域「表現」のねらいや内容に十分生かされていることがみえてきた。

キーワード リトミック、領域「表現」、リズム運動、音楽教育法、
ジャック＝ダルクローズ

I. はじめに

リトミックは、スイスの作曲家であり音楽教育家であるエミール・ジャック＝ダルクローズ (1865～1950) によって考案された音楽教育法である。音楽を聴き、心で感じたことを身体の動きを通して表現することで、より深く音楽を理解し、創造する楽しさを体験し、音楽の感性を高め、情緒豊かな人間を育てる教育法である。

ジャック＝ダルクローズがジュネーブ音楽学校で教鞭をとっていた時に、リズム学習において「聴くことは動きに結びつき、動きは感覚に訴え、そして感覚は筋肉運動感覚を引き起こす。筋肉運動感覚は情報を頭脳へ直接もたらし、その後、神経組織を経て身体に戻す。この頭脳の結合は、表情豊かな演奏・読譜・記譜・即興演奏を進歩させ、改善し、完成するのに必要な分析的過程へと導くのだ。」¹⁾と述べた。ジャック＝ダルクローズはスイスの教育者ジャン＝ジャック・ルソー (1712～1778) の音楽教育の理念からも影響を受けており、また、親交のあったスイスの心理学者エドワール・クラパレード (1873～1940) の科学的

1

な裏付けのもと、音楽ゲームと呼ばれる数々のエクササイズを生み出した。ジャック＝ダルクローズは著書の中で「もし子どもたちが自分自身の自然なリズムを意識することができるようになり、内的に音楽を聴いたり感じ取ったりすることができるようになれば、彼らは自分自身の音楽的感覚や理解を高めることについて大きな進歩を遂げるだろう」²⁾と述べている。

こうして、ジャック＝ダルクローズは、音楽を聴き、自らの身体を動かして感じ取り経験していく活動は、聴く・見る・触れる・動くといった外的感覚と、記憶する・判断する・想像する・思考するなどの内的感覚を融合するリトミックという音楽教育法を確立したのである。

リトミックが最初に日本に導入されたのは明治の末、舞踊や演劇界であった。教育界への導入は大正末(1925年)で、ダルクローズにリトミックを学んだ教育者・小林宗作(1893－1963)が先駆けとなり、成城学園やトモエ学園で実際にリトミックを教えた。小林宗作はリズム教育によって人間的な発達を総合的に伸ばしていくことを目的として挙げている。佐野和彦が著書「トットちゃんの先生 小林宗作抄伝」の中で、小林宗作の著書「幼な児の為のリズムと教育」から、「人間の体はすばらしく精巧な機械です。心はその運転手です。リトミックは体の機械組織をさらに精巧にするための遊戯です。リトミックは心に運転術を教える遊戯です。」³⁾と心と身体の調和について書かれていることを紹介している。

昭和に入り、パリへリトミック留学をした天野蝶(1891－1979)は、体育の授業の中でリトミックを活用した。そして、「3歳－6歳のもっともリズム能力伸展の時に、すべての表現技術の基礎となる基本(リトミック)を授けながら(中略)リズムにのり、リズムをつくることのできる心身を養成したい」⁴⁾そして、「頭脳と身体のコントロールにより感じたことや考えたことが適切に表現できることがリトミックの第一目標である」⁵⁾という信念のもと、日本女子大学をはじめ、各地方の幼児教育の現場で指導を行った。

戦後、板野平(1928－2009)はアメリカのニューヨークでリトミックを学び、国立音楽大学の講師として各地で講演を行った。板野はジャック＝ダルクローズの著作を訳し、幼児向けのリトミック指導のためのテキストなどを出版した。こうして戦後、子どもたちへの有効な教育法を模索していた幼児教育現場を中心にリトミックは急速に広まっていったのである⁶⁾。

こうした経緯を経て、リトミックが音楽的能力や技術を身につけるだけの教育ではないことは周知されてきた。さらに平成に入った現代は、幼稚園教育要領の領域「表現」という項目の「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、想像性を豊かにする。」とともに、「現行学習指導要領・生きる力＝知・徳・体のバランスのとれた力を育む」⁷⁾(幼稚園教育要領・文部科学省・平成20年)ことへの一つの方法として、リトミックの教育理念が充分活かされることが期待されている。音楽という部分では、より専門的な知識や技術をもった専任の講師による指導が、カリキュラムに取り込まれている園も少なくない。

今回の調査から、幼稚園教育要領領域「表現」の活動にリトミックを取り入れている意義を探っていきたい。

II. 調査方法

1. 時 期 平成29年5月、1回実施
2. 対 象 リトミックを実施している東京都5区1市の私立幼稚園6園にアンケート調査を依頼し、勤務している先生方、計72名を対象にアンケートを配布・回収を行った。倫理的配慮として、教育・研究目的の調査であり、その為の発表に同意をいただき、無記名であり回答者は特定されないこと、またどうしても答えたくない項目には答えなくてよいことなどをアンケートに明記した。
3. 調査内容
 - ① 自身が勤務している園でリトミックを取り入れている理由と思われるものを15の設問中3つに印をつける。
 - ② 次に、実際に表現活動～リトミック～の中で育まれたと強く思うもの3つに14の設問中から1から3まで順に番号を振る。
また、エピソードなどがあれば自由記載をしてもらう。

4. 園におけるリトミックのとりくみ方

園におけるリトミックのとりくみ方については、6園全てにおいて、専任の講師がリトミックの授業を担当している。参加する園児の年齢も、開始時期の違いはあれ、6園全てが年少児、年中児、年長児にリトミックの授業を行っている。年少児については4月開始が2園、5月開始が3園、6月開始が1園と、開始時期にばらつきがみられるが、まず園の生活に慣れることを優先することが考えられる。年長児については、6園全てが4月から開始している。授業の回数は、週1回が4園、月1回が1園、月2回～3回が1園であった。1回の授業時間は、年少児は20分授業が4園、30分以上が2園であるのに対し、年中児は20分授業が3園、30分以上が3園、年長児は20分授業が1園で、30分以上が5園の授業をしており、徐々に活動時間が長くなっている。また、1クラスの人数は、年長になると、15名以上20名未満がない。年少児は少人数制のクラス編成にしているが、年長になるとクラスを統合する園も有ることからこの結果がでたと推測される。リトミックを行う環境としては、5園がホールを使い、広い空間を確保していることや、どの園もピアノを使い、生の楽器の音を園児に聴かせている。

5. 調査結果

① 勤務している園でリトミックを取り入れていると思われる理由 (表1)

72名中、回答として有効なのは61名、無回答が1名、3つ選んでいない、あるいは3つ以上選んだなどの理由で無効が10名である。

その結果、「音楽に合わせて身体を動かすことを楽しむ」を選んだ者が44名 (24.04%)、「音楽に触れる楽しさを味わう」が35名 (19.12%)、続いて「表現力を育む」、「聴く力を身につける」、「自分で考え、感じたことを音や動きで表現する」が多く、この5つの設問への回答が全体の73.22%を占めた。(表1参照)

表 1

設 問	n	%
音楽に合わせて身体を動かすことを楽しむ	44	24.04
音楽に触れる楽しさを味わう	35	19.12
表現力を育む	22	12.02
聴く力を身につける	21	11.47
自分で考え、感じたことを音や動きで表現する	12	6.55
感性を養う	10	5.46
リズムに合わせて身体を思ったように動かせるようになる	9	4.91
集中力を高める	8	4.37
コミュニケーション能力が育まれる	5	2.73
音楽的な能力を育む	4	2.18
友達と一緒にイメージを共有して活動する	4	2.18
歌や合奏を楽しむ	3	1.63
想像力を育む	3	1.63
人前でも恥ずかしがらずに表現ができる	2	1.09
運動能力を高める	1	0.54
無回答	1	
無効	10	

② 実際の表現活動～リトミック～の体験から育まれたと思われる場面

回答の方式は、14の設問の中から中でも強く思うもの3つに順に1から3まで番号をふってもらったものであったが、前回は3つをチェックするという方法であったため、今回も数字でない回答をした者や、印す数が少なかったり多かったりした回答者が多く、有効人数31名、無回答2名、無効39名となってしまった。31名の有効回答者（回答率43%）が、どの項目に何番をつけたかの結果が表2である。（表2-1参照）

「音楽に合わせて身体を動かすことを楽しむ」「表現力を育む」「聴く力を身につける」を選んだ回答者は多く、1をつけた者も多い。園でリトミックを取り入れていると思われる理由が、実体験として感じ取れていたものと強く結び付いていることもうかがえる。一方で、「リズムに合わせて身体を思ったように動かせるようになる」を選んだ回答者が増えている。リズム活動をする中で、幼児のリズム感が培われていく様子が目に見えて実感できたと推測される。

4

次に、各項目の順位について、担当しているクラスによって、幼児の発達年齢との関連性と、回答の傾向があるのかを調べるために、クラス別に集計を行った。回答した担当クラスを明確に記載した回答者、年少クラスは27名、年中クラスは21名、年長クラスは15名を参考にした。（表2-2）

1番と回答した表からは、年長児になると、表現の多彩性もあり、「表現力を高める」に1番をつけた回答者が多いのではないかと推測される。また、年中児と年少児クラスではい

表2-1. 実際に表現活動～リトミック～の中で育まれたと思われる場面

設 問	番号	n	%
音楽に合わせて身体を動かすことを楽しむ	1	15	16.12
	2	6	6.45
	3	1	1.07
表現力を育む	1	7	7.52
	2	3	3.22
	3	1	1.07
リズムに合わせて身体を思ったように動かせるようになる	1	3	3.22
	2	5	5.37
	3	3	3.22
聴く力を身につける	1	2	2.15
	2	0	0
	3	9	9.67
音楽的な能力を育む	1	1	1.07
	2	1	1.07
	3	2	2.15
集中力を高める	1	1	1.07
	2	2	2.15
	3	3	3.22
歌や合奏を楽しむ	1	1	1.07
	2	0	0
	3	3	3.22
自分で考え、感じたことを音や動きで表現できる	1	1	1.07
	2	6	6.45
	3	0	0
コミュニケーション能力が育まれる	1	0	0
	2	2	2.15
	3	2	2.15
感性を養う	1	0	0
	2	1	1.07
	3	2	2.15
友達と一緒にイメージを共有して活動する	1	0	0
	2	1	1.07
	3	2	2.15
人前でも恥ずかしがらずに表現ができる	1	0	0
	2	1	1.07
	3	3	3.22
運動能力を高める	1	0	0
	2	3	3.22
	3	0	0
想像力を育む	1	0	0
	2	2	2.15
	3	0	0
無回答		2	
無効		39	

表2-2. 担当クラスの人数と回答の関係

【1番と回答】	年少 n	%	年中 n	%	年長 n	%
音楽に合わせて身体を動かすことを楽しむ	5	18.51	5	23.8	4	26.66
表現力を高める	1	3.7	2	9.52	4	26.66
リズムに合わせて身体を思ったように動かせる	2	7.4	1	4.76	0	0
聴く力を身につける	0	0	0	0	1	6.66
音楽的な能力を育む	0	0	1	4.76	0	0
集中力を高める	1	3.7	0	0	0	0
歌や合奏を楽しむ	0	0	0	0	1	6.66
自分で考え、感じたことを音や動きで表現する	0	0	1	4.76	0	0

【2番と回答】	年少 n	%	年中 n	%	年長 n	%
音楽に合わせて身体を動かすことを楽しむ	2	7.4	1	4.76	2	13.33
自分で考え、感じたことを音や動きで表現する	1	3.7	2	9.25	2	13.33
リズムに合わせて身体を思ったように動かせる	1	3.7	1	4.76	3	20
運動能力を高める	0	0	0	0	1	6.66
表現力を育む	2	7.4	1	4.76	0	0
集中力を高める	1	3.7	1	4.76	0	0
コミュニケーション能力が育まれる	0	0	1	4.76	1	6.66
音楽的な能力を育む	1	3.7	0	0	0	0
感性を養う	0	0	0	0	1	6.66
友達と一緒にイメージを共有して活動する	0	0	1	4.76	0	0
人前でも恥ずかしがらずに表現ができる	0	0	0	0	1	6.66
想像力を育む	0	0	2	9.52	0	0

【3番と回答】	年少 n	%	年中 n	%	年長 n	%
聴く力を身につける	0	0	4	19.04	4	26.66
集中力を高める	0	0	1	4.76	1	6.66
歌や合奏を楽しむ	2	7.4	1	4.76	0	0
リズムに合わせて身体を思ったように動かす	1	3.7	1	4.76	1	6.66
人前で恥ずかしがらずに表現できる	1	3.7	1	4.76	1	6.66
音楽的な能力を育む	1	3.7	0	0	1	6.66
感性を養う	2	7.4	0	0	0	0
コミュニケーション能力が育まれる	1	3.7	1	4.76	0	0
友達と一緒にイメージを共有して活動する	1	3.7	0	0	0	0
表現力を育む	0	0	1	4.76	0	0
音楽に合わせて身体を動かすことを楽しむ	0	0	0	0	1	6.66
想像力を育む	0	0	0	0	0	0

ないが、年長児クラスにおいては「聴く力を身につける」「歌や合奏を楽しむ」を1番と回答している。話の聴き方や音の聴き方に成長がみられたり、また様々な楽器に触れる機会も増え、発表などで楽器を任された時に、幼児が音楽や音をよく聴いてリズムカルに演奏する姿などがあると考えられる。

2番と回答した表からは、年少児クラスが「音楽的な能力を育む」を回答しており、音楽にあわせて身体を動かす経験が、歌や楽器演奏の活動への基礎となるからであろうと考えられる。また、1番の回答にはなかった、「コミュニケーション能力が育まれる」が、年中、年長に、3番では年少児クラスに表れている。1番目は音楽と動きそのものを選ぶ者が多いが、友達と一緒に活動する中で、コミュニケーション能力や「友達と一緒にイメージを共有して活動する」といった、人間関係の部分を選ぶ者が増えてきている。また、「友達と一緒にイメージを共有して活動する」の項目に2番も3番も年長が回答していないのは、リトミックのプログラムにもよることが大きく、年長児になるとイメージ活動というよりは、リズムパターンをステップしたり、記憶したり、拍子を表現するなどのメトリカルな活動に重心が移行しているためとも考えられる。

②のリトミックの活動を通して効果が表れたと思われた場面の自由記述

23名の具体的な回答が得られた。

3歳児では、

- ・入園当初はわからずリトミックに参加していた子どもたちが毎月リトミックの時間を楽しく楽しみに参加するようになった。
- ・2人組になる時、今まで関わりのなかった子と自然とペアになっていた。
- ・2人組になる時お互い積極的に一緒にやろうと声を掛け合っていた。
- ・ピアノの音が聞こえると、楽しそうに身体を動かすようになる。
- ・並んで歩くというだけでも、先生がリズムをとると子どももあわせて歩くことができるようになった。
- ・自由あそびの場面など、忍者や動物などになりきって表現して楽しむ姿がある。
- ・年度末にある劇遊びの中でピアノの音に合わせて身体を動かし表現する姿がある。
リトミックでピアノの音が止まったら動きを止めるという動作を繰り返したことで普段の保育活動でも保育者が話し始めるとすぐに目が合うようになった。

4歳児

- ・リトミックの時間をとても楽しみにしている
- ・リトミックでスティックを使い、講師の先生とリズム打ちのまねっこをしていたことで、お遊戯会の合奏練習で、集中して担任の動きをみて同じように叩ける姿が見られた。
- ・年少の時に習ったリズムや動きをしっかりと習得し、自然に定着して行っている。
- ・4月の時点でスキップができなかった子供が、1年間のリトミックを通して、リズム感を養い、スキップができるようになった。

- ・音階を身体を使って表現することで簡単な童謡を歌詞ではなく音名でも歌う。
- ・2人組で表現遊びをすることで仲の良い特定の子以外の誰とでも2人組を自然とつくることができる。

5歳児

- ・音の高低などの聴き分けなどよく聴こうとする態度が見える。
- ・自分から話しかけて友達と2人組3人組をつくるのが苦手だったが、少しずつ積極的にできるようになり、笑顔も増えた。
- ・新しい歌を歌った時に、歌のリズムや音程を理解するのが早かった。
- ・クラス内で劇中の歌にダンスをつけた際、リトミックでやったリズムを取り入れて、子どもたちがダンスをつくった。
- ・合奏をする際、それぞれの楽器のリズムをリトミックで行ったリズム唱で伝えたところ、すぐに理解することができた。そのため合奏に対して苦手意識をもつ子はほぼいないと見受けられる。(注：リズム唱は4分音符、8分音符2分音符などをターやティなどの言い方で表すもの)
- ・ピアノの音を聴いて自分勝手に表現するのではなく周囲に合わせる気持ちも育った。
- ・クラスの歌が上手になった。
- ・リトミックに毎年参加し経験を積み重ねることで音階をわかって歌やハンドベルの活動に参加する姿が見られるようになった。
- ・ハンドサインを使っていろいろな曲を歌うことができるようになっている。(注：ハンドサインは音階の高さを身体の部位を使って認識しやすくするための物)
- ・交互唱、心唱、摸唱を学び、自分で考えコントロールすることができるようになってきている。(注：心唱は、音階や歌の一部分を心の中で音をイメージして歌うこと)
- ・スキップやリズムが変わったら反対回ることなどもはじめは難しかったが回数を重ね上手になってきている。

3歳児～5歳児全般

- ・リトミックの時間を楽しみにしている
- ・簡単な楽器あそびからお遊戯会での合奏発表に到るまで、楽器を扱う機会を度々設けているが、その中で自然と拍子を取り、音楽に合わせて心地よさそうに身体を動かす姿が見られるなど、リトミックで指導していることが身につけていると感じる場面が多々ある。

8

考察

本調査は、リトミックが良さそうという漠然とした情報や、本で読んだ知識や技術だけではなく、実際に幼児と共にリトミックを体験している教師が、リトミック教育をどのように理解し、幼児一人ひとりの姿から見えてきたことは何かを調査し、幼児がリトミックをより良く学べるよう考えていくためのものである。

リトミックを受けている6園の園児の総数は年少児371名、年中児297名、年長児625名である。

今回の調査では、園がリトミックを取り入れていると思われる理由では、音楽的な能力や技術的な向上を前提としているのではなく、音楽に親しみ、よく聴き、身体を動かし表現するリトミックが、幼稚園教育要領の領域「表現」の「感じたこと、考えたことなどを音や動きで表現する」「音楽に親しむ」「自分のイメージを動きやことばで表現する」といった内容を具現化するのに、適していると考えられる。これは②のリトミックを体験していく中で育まれていると思われる項目にも反映されている。クラスごとの結果では、項目の選択に思ったほどの大きな違いはなかった。しかし、自由記述にも書かれているが「コミュニケーション能力が育まれる」の回答率が上がった。どの年齢にも共通なのが、2人組や3人組になる時、クラスの誰とでも、自発的に組もうとする姿がみられると書かれていることである。これは、リトミックの活動形態の特徴でもあるが、1回のリトミッククラスの中で、2人組、3人組、少人数のグループ、クラス全体というように他者との様々な関わり方を体験するところにある。文科省が定める指導計画の「幼児の行う活動は、個人、グループ、学級全体などで多様に展開されるものであるが……(後略)」という点にも合致している。リトミックが発達年齢に沿った指導内容で行われていることは、各年齢の具体例を見ても明白である。3歳児では音楽に合わせて身体を動かす時にその音楽に様々なイメージをもたせて活動するリトミックの経験が、自由あそびや劇あそびの場面で表現を楽しんでいる様子に表れており、指導要領の内容(8)自分のイメージを動きやことばなどで表現したり演じて遊んだりするなどの楽しさを味わうというところに合致する。4歳児ではリトミックで習得したリズムや動きの経験が、合奏のリズム打ちに活かされている。指導要領の内容(6)音楽に親しみ、歌を歌ったり、簡単なリズム楽器を使ったりするなどする楽しさを味わう。ところである。5歳児ではリズムを理解し、ダンスを創作したり、楽器演奏にも活かすようになっている。指導要領の内容の取扱いにあるように、(3)(前略)自ら様々な表現を楽しみ、表現する意欲を十分に発揮させることができるよう……(後略)な機会や「……表現する過程を大切に自己表現を楽しめるように工夫すること」がリトミックの時間で体験され、園の表現活動の中でも活かされていることがわかる。リトミックの基本である「聴くこと」は音楽だけではなく、相手の話をよく聴き、理解する集中力や注意力、思考力、判断力も養われる。先生の話聴き、理解したことを身体を使って表現する作業は、幼児の内から発せられる主体的な行為である。5歳児では知識的なことも理解して、それを表現手段の一つとして活動している姿がうかがえる。

今回6園ともリトミックは専任講師が担当しているが、園の先生方が歌や合奏、劇遊びの指導の中で、リトミックの方法や経験を活かして、学んだことを子どもたちと共有しながら一緒に一つの作品を創っている姿が、自由記述で見られた。まさに、指導計画の留意事項にある「教師は理解者であり、共同作業」の一例であると考えられる。

まとめ

ジャック＝ダルクローズの音楽教育法の基礎は聴くことであり、身体運動を通して聴いたものを表現するところに意味がある。

楽器や歌などの技術を身につけたり、演奏させたりする前に、自分の心におきた感覚を筋肉運動感覚を使って表現することにより、音楽と身体、感情の融合を自覚し、主体的な自己表現へとつながっていくのである。

表現という領域は数字で測れない分、先生の持つ技術や発想力、感性による影響も大きい。しかし、今回の調査で、リトミックの意義や幼児の姿から見えてきたことは、先生が幼児と一緒に活動に参加しているからこそ感じ取れたことである。マクドナルド&サイモンズは「表現活動をする時の保育者の役割」として「幼児が音楽を体験する空間は保育者の態度（価値観）に依存している。つまり『幼児の音楽的発達、幼児が大人と一緒に楽しい音楽的経験に参加する多くの機会を与えられて高められるのである』⁸⁾と述べている。今回、各園ともリトミックの専任講師が担当していたが、専任講師や園の先生、様々な友達との触れ合いの中で、互いの考えを認めあい、協力し合い、さらに工夫をして、様々な体験をしていく。その時、多種多様な表現方法を知り、自分が思ったことを思ったように表現できる身体と心を手に入れた子どもたちは、さらに自己表現を高められる。そこに、リトミックの存在意義があると考えられる。

「表現」におけるリトミックの意義を理解し、幼児にとってさらに豊かなリトミックの活動になるよう取り組んでほしいと考える。また、今回の調査にあった先生の気づきが園生活全体へと視野を広げ、幼稚園教諭の専門性が高まることを期待するものである。

参考文献

エミール・ジャック＝ダルクローズ著 板野平・監修 山本昌男・訳
「リズムと音楽と教育」全音楽譜出版2003年

引用文献

- 1) L・チョクシー／R・エイブラムソン／A・ガレスビー／D・ウッズ共著 板野和彦・訳「音楽教育メソッドの比較」全音楽譜出版社1994年、第3章p.61～62
- 2) ヴァージニア・ホッジ・ミード著 神原雅之／板野和彦／山下薫子・訳
「ダルクローズ・アプローチによる子どものための音楽授業」ふくろう出版2006年p.6
- 3) 佐野和彦「トットちゃんの先生 小林宗作抄伝」話の特集1985年p.60
- 4) 天野蝶「幼児リトミック〈天野式〉」共同音楽出版社1966年p.92
- 5) 同上書p.41
- 6) 板野晴子「日本におけるリトミックの黎明期」ななみ書房2016年p.131
- 7) 幼稚園教育要領・文部科学省・平成20年
- 8) ドロシー・T・マクドナルド&ジェーン・M・サイモンズ
「音楽的成長と発達－誕生から6才まで－」溪水社1999年